

# 図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第27巻1号(通巻173号) 2005.4.1

vol.27

NO. 1

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

高橋伸幸

## 2 好きです札幌



地平線へ続く道(カナダ・アルバータ州南東部)

織田有基子

## 3 六法雑感

福野光輝

## 4 授業のない日

小林淑憲

## 5 攻めるということ

郡司 淳

## 6 図書館ノス、メ

使おう・借りよう・探そう

## 7 図書館利用ガイド

## 8 図書館用語のポイント

編集後記

# 好きです札幌

文＝高橋伸幸

(たかはし のぶゆき／工学部教授)

入学おめでとうございます。これからは大学生として学生生活を送っていくことになる訳です。さて、そこでこの間に何をやるかということが重要になってきます。もちろん学生の本分は勉学です。しかし、それと同時に人間の幅を広げるのによってつけの時期がこの学生時代です。それは、自分の裁量で自由に使える時間が多くあるからです。

私は、これまでに日本各地はもちろんのこと、ケニヤを手始めとして、ヨーロッパや南アメリカ、中国、ヒマラヤ周辺、ニュージーランド、果ては北極、南極地域にまで足を伸ばし、現在は在外研修でカナダに滞在しています。各地を訪れるたびに日本では見られない雄大な自然に圧倒されたり、人々の暮らしや文化に興味を抱いたりしてきました。そして、その度に思うことは、日本は本当に素晴らしい国だ。住むならやはり札幌に限ることです。私は道産子ではありません。今までにいくつかの場所で暮らしてきて、気がついてみたら札幌が一番長居している場所になっていました。人それぞれに住みやすい場所というものはあるでしょうが、他と比べてみることで、その場所の良さをより強く認識するのだと思います。私の場合は、それが札幌でした。北海学園大学に入学されてくる皆さんの大部分が、おそらく北海道出身でしょう。そして、その中の多くの方が、札幌近郊の出身ではないかと思えます。時折、学生に卒業後のことを尋ねてみる場合があります。すると、北海道（札幌）で就職し北海道（札幌）に住みたいという答えがしばしば返ってきます。そこで、なぜ北海道や札幌にこだわるのかと尋ねてみますと、実家があるからとか、住み慣れた場所だからとか、他の地域を知らないからという返事が返ってきます。しかし、これらの答えの中には、北海道（札幌）がよい場所だから、あるいは北海道（札幌）

が本当に好きだからというような要素は残念ながら見当たりません。このような意識は、他の場所を知り、その場所と比べることにより芽生えてくるものだと思います。学生の中には修学旅行以外で北海道から出たことがないという人もいます。これでは、他の場所と札幌を比べようもありませんし、札幌の良さを認識しようもありません。私は、この先も札幌に住み続けたいと思っています。その点では、上述のような答えを返してくる学生と同じです。では、北海道で生まれ育ち、現在まで北海道で暮らしてきている人と私とで、どちらが北海道や札幌の良さをより認識しているのでしょうか？それは、断然私の方です。

そこで、私が言いたいのは、若いうちに外の世界を知れ！ということです。現在は情報化社会ですから、各種のメディアを通して簡単に各地の情報が手に入ります。しかし、それだけではその場所を知ったことにはなりません。自分の身を実際にそこに置き、五感を通して体感することによってのみ、本当にその場所を知ることができるのです。そして、そこで始めて北海道（札幌）の良い所、悪い所が見えてくるのです。そのためにこの大学の4年間というのはまたとないチャンスです。わずかばかりの小遣い稼ぎのためにアルバイトなどしている場合じゃありません。金を稼ぎたいければ、大学を出てからやればよいことですし、アルバイトのために留年でもしたら、それこそ元も子もありません。留年した分の授業料に見合う稼ぎがアルバイトでできますか？

先行き不安定な現在の日本で、中でも経済的にも沈滞気味な北海道の中で暮らしていこうとするなら、自らの手で北海道の良さを伸ばし、北海道を発展させていくしかありません。そのためには北海道を、札幌を本当に好きになることです。

# 六法雑感

文＝織田有基子

(おだ ゆきこ／法学部教授)

法律の勉強には「六法」が欠かせません。六法ないし六法全書とは、一般に、憲法、民法、刑法、商法、民事訴訟法、刑事訴訟法の6つの法典の他、主要な現行法令を集めた書物を指して用いられます。「主要」といっても、その内容に特に決まりがあるわけではありません。実際、収録する法律の数、内容、編集に工夫を凝らした実にさまざまな種類の六法が、複数の出版社から刊行されています。大学における法律の勉強の大部分は、とどのつまり条文の解釈手法の習得にありますから、学習に際しては関係条文を参照し得る態勢を常に整えておく必要があります。従って、六法を携えて授業に出ることが求められるわけです。とはいえ、六法そのものは読んで面白いといった類のものでもなく、たいていの人にとっては、ずっしり重くて肩の凝る厄介な存在でしかないというのが正直なところでしょう。

しかし、日本では当たり前のように利用され、あるいは敬遠される(?)この六法というもの、実は、外国ではあまりお目にかかれない、なかなかユニークな代物なのです。たとえば、イギリスやアメリカにはこの種のものはありません。ある特定の現行法を(紙媒体で)探す場合には、法令が制定順に並べられている法令集(*Law Reports : Statutes*《英》/*Statutes at Large*《米》等)か、現行法令を何十もの分野別に整理・分類した法令集(*Halsbury's Statutes of England and Wales*《英》/*United States Code Annotated*《米》等)が用いられます。しかし、法令が時系列式に並べられている前者を用いて現行法の状況を把握しようとするれば、当該法令のその後の改正や廃止についても一つ一つ丹念に追いかける必要がなくなりませんし、後者は何十冊もの本から成る大がかりな法令集ですから、その中から法律を探し出すことはこれまた結構骨

の折れる作業です。フランスやドイツにも、同様に、法令を制定順に並べた法令集や現行法令を分野別に整理した法令集があり、特に後者(*Petits codes Dalloz*《仏》/*Beck社*の*Schönfelder*や*Sartorius*《独》等)は非常によく用いられますが、やはり何冊にも分かれていたりルーズリーフ式だったり、日本の六法ほど簡便なものとは言えません。現在のところ、日本の六法のような法令集が刊行されている国は、教材用として特に作成されるものを除けば、中国、台湾、韓国、オランダ等、ごくわずかに過ぎないようです。

六法は、既に明治時代から作られ続けてきました。我が北海学園大学の図書館にも、明治42年(1909年)の「帝国六法全書」(訂正増補改版19版、有斐閣)が収められています。しかし近年、社会情勢の変動に伴い制定法令の数および分量が増大するにつれ、六法はかなり大型化しました。また、法令の改正や廃止自体も頻繁です(なお、今年(平成17年4月)から民法の一部改正が施行されますが、今回の民法改正案が国会を通過する前に刊行された平成17年版六法の多くは、改正前の条文を掲載しています)。さらに、インターネットやDVD等の電子媒体による法律情報の入手も、随分容易になりました。このような環境の変化は、六法の今後のあり方に影響を及ぼすものと思われます。しかし、そうであっても、現行の主要法令が、これほど携帯し易く、かつ(紙媒体であるが故に)一覽性に優れた形にまとめられ、しかも毎年(刊行時点では)最新の内容のものを比較的廉価で購入し得るといふ六法の魅力は、そう簡単には色褪せないでしょう。法律を学ぶ学生の皆さん、日本が世界に誇る六法をもっと積極的に使いこなしてみませんか?

# ■ 授業のない日 ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

文= 福野光輝

(ふくの みつてる / 経営学部助教授)

「センセイ、授業がない日ってなにやってんすか？」— 一かつてゼミコンへ行く道すがら、装甲騎兵ボトムズの主人公キリコ・キュービー似のイケメンゼミ生 太田くんになにげなくいわれた言葉である。「研究だよ、太田」と即答できない自分にやや自尊心を低下させながら、「じゅ、授業の準備だよー、太田くん。ああみえて、これかっつこう大変なんだよ」と取り繕うように答える自分がいた。実際、赴任してまもないころで、ほくはまた慣れない授業の準備に追われていた。というか今もなぜか追われている。

2004年4月から経営学部の2年生に「社会心理学」を教えることになった。社会心理学はほくの専門である。だったら教えるのも簡単ではないかとお思いになるかもしれないが、逆にいろいろなテーマに移りしてしまって、何をどこまで話せばいいか判断するのはかなり悩ましい問題である。専門とはいえ社会心理学があつかう範囲は広く、毎回の授業で90分もつだけのネタは当然なかった。それでも4月初回のオリエンテーションでは全25回の授業のテーマだけはなんとかシラバスに並べた。

「社会心理学」は水曜だったが、月曜と火曜には「行動科学概論」という別の授業があったので、「社会心理学」の準備は毎週日曜までに終わらそうと心に決めた。第1回目の授業のテーマは印象形成。ほくらは他者に対する印象をどうやって形成しているのかというやつだ。はいはい、中心特性とか周辺特性ね…ってそれしか浮かばない。あわてて数冊の教科書や専門書をひっぱりだし、印象形成の章を併読しながら、全体のストーリーを考えることから始めなければならなかった。印象形成の章をいくつか読んではいじめて、自分の頭のなかはそのストーリーがおぼろげながらみえてくる。ふんぶん、だいたいどれも「印象形成とはなにか」って話から「印象形成を左右する手がかりにはなにかがあるか」に行って、最後に「いろんな手がかりを人はどうやってまとめているか」という流れだな。じゃあ最初に印象形成の定義を述べて、つぎに印象形成を左右する特徴的な手がかりを2、3紹介してから、印象形成に関するモデルをひとつ話すことにしよう。とい

うかそもそもなんで印象形成なんて考えないといけないんだらう。かんたんに印象形成の重要性にもふれないと、はじめてこんな話を聞かされる学生さんはわかりにくいよな。ここまででもう月曜のお昼である。

えっと、印象形成の手がかりの例として中心特性とネガティブティ・バイアスを話すことにしよう。で、中心特性を実験で確かめたアツシュの研究が載っている雑誌は図書館にあった。うわ、ない！ 月曜も終わろうとしていた。

火曜の午後、ほくは北大の文学部図書室でアツシュの論文をコピーしていた<sup>1</sup>。北大での戦利品を研究室にもちかえり、ひと仕事終わった気分ひたりにながら、西武の地下1階で買ったベーグルなどを食べていると、あつという間に2部の「行動科学概論」の授業だ。それが終わるころには火曜の夜もふけていた。

しかしここから本番だ。向かいのサンクスで買った納豆巻きと春雨スープで腹をみだし仮眠だ。2~3時間寝た後、本当に明日授業できるのかという強烈なプレッシャーを感じつつ、スキヤナよ、今夜もちゃんと動いておくれと祈りつつ、グーグルよ、なにかトピックに関連のあるおもしろ写真を探さしておくれと切に願いつつ、よろよろとスライドをつくっていく。ようやくスライドが30枚ほどできあがるのは、朝型のK先生やA先生の札が白くなるころである。

あー話だけじゃつまらないから中心特性のデモを入れよう。水曜のお昼近くになっていた。もうろうとしながらデモのスライドをつくり、資料を印刷して、なんとかこれで90分くらいはもつかなと思うころには授業まであと10分になっていた。

授業後、「話し方が単調で眠くなる」、「先生自身が内容を理解できてないようなところがあり不安だった」などと書かれた授業評価アンケートをみながら、授業のおもしろさと徹夜はやっぱり無相関だよなと実感する。そんな夜はスープカレーだけが、「だーかーらー、もっと早めに準備しろって」という内なる声のつつこみを忘れさせてくれる。

<sup>1</sup> このおかげで、今ではかなりのデータ強迫症になってしまった。授業で話をするときには、話の根拠として実験や調査の結果を示さずにはどうも落ち着かないのだ。その結果、毎週火曜の午後は、本学や北大の図書館の書庫で論文集めをするようになってしまった。もっともこれかいいか悪いかは別問題である。この点は強調しておく。

# 攻めるということ

文＝小林淑憲

(こばやし よしのり／経済学部助教授)

綺羅星の如く居並ぶK1ファイターの中で、私はアンディ・フグが一番好きだった。彼は打たれると前に出たからだ。打つても打つても攻めてくるフグを相手は恐れた。

新入生の皆さん、入学おめでとう。皆さんの多くが様々な期待・希望とほんの少しの不安で胸をワクワクさせていることであろう。でも中には、学園大は第一志望ではなく、少し影のある複雑な気持ちで入学式に臨んだ人もいるかもしれない。いずれにしても皆さんは、4年間という貴重な時間をゲットした。いわゆるモラトリアム期間だ。そこで、まず知って欲しいのは、皆さんと同年代の、大学へ行かなかった人たちと比べて、皆さんがいかに恵まれているかということだ。何しろ、どんな仕事に就くかの決定を先延ばしにする時間を得たのだし、手に入れた豊富な時間はかなり自由に使えるわけだから。

しかし、恵まれた境遇にありながらも、皆さんの中には、実は自分が将来何をやりたいのかわからないと悩んでいる人がいるかもしれない。昨今、キャリアデザインを売り物にする大学が散見されるが、まだ働いたこともない学生が自分のキャリアをデザインするのはなかなか難しいだろう。ここは昔ながらの方法で、つまり、とりあえず何か興味のあることを自分でやってみることだ。ただ待っていても貴重な時間は過ぎて行くだけだ。とにかく自分の足で一歩を踏み出すことだ。そして今の時代にそぐわない表現を取って使えば、踏み出した後は必死でもがき、あかくことだ。

人が何か行動を起こすにはキッカケが必要だが、その種類は問わない。私の大学時代のある友人(「よしひろ」という)は、当時『週間文春』に連載中だった手塚治虫の『アドルフに告ぐ』がキッカケで現代史を論じた本を何冊か読み、ヨーロッパへ行くことを思い立った。居酒

屋でバイトして金を貯め、それを元手に初めて行った西欧旅行で個人旅行にハマリ、二度目は東欧に行くことを思いついた。しかし資金がない。かと言って、居酒屋での重労働は時間的体的にキツイと思いつながらも、東欧旅行を夢見ていた。そんなとき、友人はミニバイクを運転中、交差点で自動車と「こんにちわ」をして足を骨折した。首尾よく(?)多額の保険金をゲットした彼は、数カ月後、晴れて東欧へ旅立ったのである(帰国後、彼がみんなから「当たり屋よっちゃん」と呼ばれたことは言うまでもない)。まだ冷戦の続いていた頃の東欧で、見慣れない東洋人の友人は、足蹴にされたこともあったという。ほとんど役に立たないカタコトの英語で、彼はかの地を見て回り、人間を観察してきた。卒業後、友人は地元で新聞記者になり、今では毎日記事を書いている。彼が取材して書いた記事が、超有名雑誌編集者の目に止まり社会問題として注目されたこともあった。

キッカケは何でもいいから、面白そうなことに首を突っ込んでみることだ。大学4年間はその気にさえなれば、いろいろなことにチャレンジできると思う。人生を切り開くのはその人の持っている総合力だ。勉強ができるに越したことはない。だが勉強ができるだけでは不十分だ。友人はいた方がいい。たくさんの友人がいれば、貴重な情報が手に入る。実家が裕福であればその資産はもちろん武器になる。運も重要だ。だが、一番大事なのは攻めることだということを忘れてはいけない。そして打たれてもあきらめないことだ。常に攻めの気持ちでいることだ。特にこれからの時代は、もがいてあかかないと人生は切り開かれない。

それでもまだキッカケにこだわりたいなら、とりあえず図書館で本を一冊手に取ってみてはどうだろうか？

# 図書館ノス、メ

文=郡司 淳

(ぐんし じゅん/人文学部)

学生の一番の特権は、暇な時間を持っていることにある。何事につけ、経済効率優先のこの御時世にあっては、尚更そのことが得難いもののように思えてくる。だからこそ、折角のこの暇な時間を、日頃学生諸氏がよく口にする「いろんな経験を積む」ことなどに費やすのは、もったいないことこの上ない、と考えるのは私だけであろうか。じっくり物事を考えるためには、暇であるに如くは無いはずなのだが……。

そうであるなら、暇な時間を過ごすのに、図書館ほど最適な場所はない。それでなくとも昨今、BGMという名の騒音に悩まされることなく、沈黙思考でき、孤独にもなれる場所は、図書館以外なかなか周囲に見つけることができなくなってしまった。

だから図書館を単に必要な本を借りるだけの場所と考えている学生がいるなら、それは大きな間違いである、といいたい。すくなくとも私にとっては、図書館とは、ゆっくりと時間をかけて散策すべき知識の森である。本学でいうなら、豊平校舎にある本館の2階と3階、および工学部図書館（山鼻校舎）の開架スペースにしばらく通ってみてはどうか。そうして、書架にある本を一冊ずつ実際に手に取って頁を繰ってみる。そこには、これまで見たこともない世界が広がっているのである。リョコウナンゾニイッテオレマスカ。

近年、いずこの図書館も蔵書カードからパソコンを利用したオンライン検索資料目録（OPAC）に移行し、それはそれで大変便利なのだが、折角未知の本と直接出会うことのできる機会を、むざむざと逃す手はない。およそ、モノというものは、実際に手に取ってみてはじめてそのありようがわかるというものである。本とて例外で

はない。だから私などは、開架式の図書館でパソコンの前に張りついている学生を見ると、「ああ、何とものたないない」と思ってしまうのである。「足で稼ぐ」とは、今も昔も変わらぬ真理なのだ。

こうして図書の配架位置を諳んじる程度にまで開架スペースを熟知したら、次は閉架書庫へと関心が向くことになるだろうが、この部分は自由に入出入りするというわけにはいかない。それでも、図書館の方をお願いして、すくなくとも一度は先人の知恵の宝庫である書庫に足を踏み入れてほしい。かくいう私も、日頃閑を見つけては、新たな本との出会い求め、書庫内をあてもなく彷徨しているのである。薄暗い場所は性にも合う。

幸いにして本学の図書館は、こうした知的好奇心を十分満たしうるに足る蔵書を質量とも誇っている。実際、昨年4月に本学に赴任した私は、自分の研究分野にかかわる基本図書の有無について調べ、ほぼそれが網羅されていることに安心もし、感心もしたのである。それまで大学に職を得るとは考えてもいなかったもので、ありがたさが身にしみた。

仮に読みたい本が図書館に所蔵されていない場合でも、購入希望を出せば、応えてくれるはずである（詳細は図書館利用ガイドを熟読されたし）。したがって一方、将来万が一本学の図書館が貧弱であるとの誹りを受けるとすれば、その責任の一端は現に教員である私が負うべきであり、学生諸氏もこれと全く無関係であるとはいえない。そもそも、洋の東西を問わず、図書館が大学の顔であると言われる所以は、それが教員と学生の知的レベルを映す鏡にほかならないからなのである。

使おう・借りよう・探そう

# 図書館利用ガイド

## 図書館利用案内を見よう!

「利用案内」では、簡単な図書館の使い方をたくさん載せています。

## 図書館を使おう!

### たくさんの蔵書がある!

本館(豊平校舎): 文系中心、かつ一般教養

工学部図書室(山鼻校舎): 土木、建築、電子中心

### 朝9時から夜遅くまで開館している!

### インターネットが使える!

### レポートや論文をゆっくり書ける!

### 文献が探せる&手に入れられる!

文献を探すには、インターネットやOPAC(公開検索)を使ったり、テキストに載っている参考文献を利用するなど、いろいろな方法があります。

本学図書館に所蔵している図書館資料は、著作権の範囲内でコピーを取ったり、借りることができます。本学にないものは、他の大学図書館や機関から取り寄せできます。

詳しくは、サービス・カウンターに相談を!

## 本を借りよう!

- ・学生証と借りたい図書をサービス・カウンターに提出してください。
- ・貸出は5冊、15日間まで。予約がなければ延長できます。
- ・返本は、サービス・カウンターにお出しください。  
(業務終了後は、返却用ポストに投函してください)

## 本を探そう!

本学図書館に所蔵している図書館資料は、OPACで検索することができます。

### 開架図書

本館2F、もしくは3Fの書棚に配架されています。

### 閉架図書

書庫にある図書です。請求票出力、もしくはOPAC備え付けの「閲覧証」をご記入の上、サービス・カウンターまで申し込んでください。

### 工学部図書

工学部図書室で所蔵する図書です。本館からは取り寄せが可能です。

### 読みたい本、見たい本があったら

図書館に所蔵していない購入希望図書があれば、「備付希望図書申込書」に記入して、利用者希望図書ポストへ投函、または、サービス・カウンターへ申し出よう。

## 情報を探そう!

●利用の前に、サービス・カウンターで申し込み手続きをしよう!

### PC(情報検索)ブースを使う!

PCブースでは、インターネットとCD-ROMの利用ができます。本学のOPACになかったら、NACSIS Webcat (<http://webcat.nii.ac.jp/>) を使ってみよう。これは、全国の大学図書館の蔵書を調べるデータベースです。見つけた本の利用については、レファレンス・カウンターで相談しよう。

### AV(視聴覚)ブースを使う!

AVブースでは、カセット・テープ、ビデオ・テープ、CD、LD、DVDなどの視聴覚資料が利用できます。サービス・カウンター横にある視聴覚資料所蔵リストで見たいものを探してください。

なお、個人の持込利用はできません。

# 図書館用語の

# ポイント

## ●OPAC (公開検索)

Online Public Access Catalog の略で、オンライン検索資料目録といえます。本学では「公開検索」と呼び、資料をデータベース化していますので、どんな資料が所蔵されているかを調べることができます。

## ●参考文献

研究や調査目的のために参考となる文献資料。

## ●図書館資料のコピー

著作権の範囲内で、コピーが可能です。

## ●レファレンス

参考業務ともいう。利用者の求めに応じて図書館員が資料の検索や提供などのサービスを行うこと。

## ●NACSIS Webcat

国立情報学研究所が提供しているWeb上での総合目録データベース。全国の大学図書館が共同作成しているもので、どこの図書館が所蔵しているかを調べることができる。

## ●書誌情報

個々の資料を識別できるように、書名、著者名、出版社などの事項を一定の方式にしたがって記述、配列したりリスト。

## ●所蔵情報

OPACで、希望の資料が所蔵されている場合、その配架場所、所蔵ID、ステータス(資料の状態)、請求記号などの情報のこと。複本があると何件も表示される。

## ●配架場所

配置場所のこと。本学では本館開架、本館閉架、工学部開架、工学部閉架など。

## ●開架、閉架

利用者が直接書架から自由に図書資料を選んで利用できる図書を開架図書、また、書庫内にある図書を閉架図書といいます。閉架図書の場合、係員に取出しを請求します。同じ図書が開架、閉架双方にある場合は、開架の図書を利用してください。

## ●請求記号

図書資料の配架されている位置を示す記号。一般的には、分類番号と図書記号(著者記号)の組合せで表している。

●請求記号とは!?

分類番号	918.6
著者記号	Y89
巻数等	17

## ●分類番号

日本十進分類法によって分類された番号。

## ●図書記号

同一分類番号を付与された複数の資料をさらに個別化するための記号。本学では、著者記号を使用。

## ●著者記号

著者を表す記号。著者の読み(カタカナ、ひらがな、ローマ字など)及びタイトル名から綴りの初字(1から3字)または数字との組合せでできています。

## ●予約

利用したい図書が貸出中の場合、予約をすることができます。

## ●利用者希望図書ポスト

図書館に所蔵していない図書、欲しい図書は、購入希望を出してください。

## ●製本雑誌

雑誌類何冊かを綴じあわせて扱いやすいように一冊にまとめたもの。本学では製本すると貸出できます。

## ●白書

政府や地方公共団体が出す公的報告書。

## ●目録

蔵書を検索するために書名、著者名、件名、分類番号などを一定の配列に編成したもの。

## ●奥付け(おくづけ)

図書の末尾にある書名、著者、発行者、発行年月日、定価等の記載されたページ。

## 編集後記

みなさんの周りには「足が大きくて困っている……」なんて人はいませんか？ 靴を買いに行っても、サイズや種類がないなどの悲しい思いをしている人を、きっと見たことがあるのではないのでしょうか？ それらは意外と深刻な問題で、スポーツをするときにも大きな影響を及ぼします。スキーだったら板はあるのにブーツがないとか、最近人気のあるフットサルでも「ボールが小さくてうまく蹴れない」などなど……。そんな私も足のサイズは30cm。普通に蹴ると地球を蹴ってしまうのでトーキックしか出来ない始末。いつもつま先が悲しい悲鳴をあげています……足、小さくならないかな～……。

そんなわけで(足のサイズには関係ありませんが)、図書館にはフットサルをはじめ、たくさんの方のスポーツに関する本やDVDなどの資料が揃っています。DVDとビデオで実際に動いているところを見ることが出来るので、授業で体育のある人や課外活動などをやっている人にも役立つこと間違いなし！ ぜひ一度、図書館へ来てみてください。